

Title	コスモロジーの変容過程に関する臨床心理学的研究 : ALS患者と神女(カミンチュ)の事例をもとに
Author(s)	橋本, 朋広
Citation	大阪大学, 2000, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/41990
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について 〈/a〉 をご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

氏名	橋本朋広
博士の専攻分野の名称	博士(人間科学)
学位記番号	第 15120 号
学位授与年月日	平成12年3月24日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 人間科学研究科教育学専攻
学位論文名	コスモロジーの変容過程に関する臨床心理学的研究 —ALS患者と神女(カミンチュ)の事例をもとに—
論文審査委員	(主査) 教授 倉光 修 (副査) 教授 三木 善彦 助教授 老松 克博

論文内容の要旨

本論の目的は、二つの事例研究に基づいて、コスモロジー (cosmology) の変容過程を臨床心理学的に研究することである。コスモロジーとは、世界あるいは宇宙 (コスモス) について、その全体がどのように成り立っているか、そこに存在するものたちはどのように関わりあっているか、ということに関する解釈であり、それによって人は世界あるいは宇宙の全体像を把握する。

現代人の多くが共有しているコスモロジーは、17世紀以降に発達した近代科学の知によって形成されたものである。このコスモロジーを根拠づけるのは普遍性・論理性・客観性の原理であり、その意味でこれを「合理主義的コスモロジー」と呼ぶことができる。しかし、合理主義的コスモロジーが発達する以前には、それとは別の原理によって成り立つコスモロジーがあった。それは、神話によって基礎づけられるコスモロジーであり、そこでは神々や他界が現世と同等の現実性を持つものとして扱われたのである。合理主義的コスモロジーに対し、これを「神話的コスモロジー」と呼ぶ。

合理主義的コスモロジーは、物質文明の発展には有効であったが、その半面、合理主義的観点によって把握できない経験を切り捨ててしまった。つまり、他界や神々の現実性を不合理なものとして切り捨てることで、現代人は生と死を包括する観点を失ってしまったのである。合理主義的コスモロジーは客観的に観察できる世界だけを現実と見なすので、他界をも含めたコスモスの全体性を実感することは、現代人にとって実に困難なのである。しかし、現代人の中にも、合理主義的コスモロジーを包括し、より高次の神話的コスモロジーを形成する人々がいる。では、どのような過程を経てそのような変容が起こるか、そして、その過程を展開させる基本要因は何か。本論では、合理主義的コスモロジーから神話的コスモロジーへの変容という希有な体験をした人々について事例研究を行い、それらの問題を考察した。

第一章では、神話的コスモロジーの生成に関する先行研究を概観するため、Eliade と Henderson の研究に注目した。

Eliadeによれば、未開社会ではイニシエーション儀礼によってコスモロジーが伝承される。イニシエーション儀礼の主要なモチーフは、神や精霊のような超越的存在に直面すること、それに殺され無力化されること、それが体現する価値に従うこと、そして更に超越的存在と自由に交流することである。未開社会の成員は、儀礼の中でこれらの体験をし、現世と他界を包括する神話的コスモロジーに開かれるのである。

しかし、このようなモチーフが現実性を持つためには、共同体が神話を共有している必要がある。では、神話的現実を喪失した現代人にとって、コスモロジーの変容はどのように可能になるか、その問題が次に考察された。

そこで着目したのが、現代人のイニシエーション経験に関する Henderson の研究である。彼によれば、現代人は儀礼としてのイニシエーションこそ失ったものの、夢やイメージによってイニシエーションに似た経験をしており、それらの意味を意識的に捉え直すことで自我の変容を経験する。そして、自我が成熟するに伴って、次第に豊かなコスモロジーが生成する。Henderson は、現代人の自我発達に「服従－包含－解放－内在」の四段階があることを明らかにした。自我は、母なる本能的世界から父なる精神的世界に移行し、それに服従する。次に父なる世界から集団に包含され、そこで集団の権威に同一化しつつ安定したアイデンティティを獲得する。更に、異性像との真剣な関わりを通して集団への同一化から解放され、集団を超えた自分固有の衝動性を意識化する。そして、最終段階において集合性と個別性の間に葛藤が生じるが、圧倒的な超越的存在のイメージ（神やマンダラなど）を経験することで、自我は、対立要素を統合し全体性を生み出す高次の働き、すなわち「自己」（Jung）の働きに気づくようになる。こうして、自我は自己の働きの内にありながら、それに照らして自分独自の在り方を見出す内在の状態に至り、自分を包み込むコスモスの全体性に関するイメージ（神話的コスモロジー）を獲得するのである。以上の研究から、本論では自我の変容が神話的コスモロジーの生成につながると考え、その変容過程を展開させる基本要因を探った。

第二章では、筋萎縮性側索硬化症（ALS）患者が救いを見いだす過程を検討した。それによれば、身体的機能が衰える過程で、彼らは自由性や独立性に固執する自我の観点を相対化し、その限界性を認識し、その上で宿命に規定されつつ、それに対峙する個というイメージで自分自身を見るようになる。そして、そのような観点から森羅万象に出会うことで、人間中心的で操作主義的な合理主義的コスモロジーを相対化し、共生的コスモロジーを体験する。つまり、全ての生き物は自分の宿命を必死に生き抜き、そして死に、生命の連鎖を繋いでゆく同胞に見えてくるのである。このような共生的コスモロジーによって、ALS 患者は救いを見いだしていた。

この段階に至った ALS 患者が生き物と出会う時、彼らは単に「もの」としての生き物に会っているのではなく、より根源的なイメージに出会っているのである。例えば、彼らにとって白菜を見るということは、単に「野菜」を見ることではなく、この地上に脈々と沸き上がる神秘的な生命力のイメージを経験するということなのである。つまり、自我が自分の観点到固執する場合、経験は自我の統制によって予め設定された枠組みに切り取られてしまうため、そこに新鮮な驚きや感動が入り込む余地が減少し、出会いの経験において現れようとしている様々なイメージが感じ取られないままになってしまう。しかし、自我の能動性に限界を感じ、先ずは自分に見えてくる世界をありのままに見ようとする（自我の相対化）、より根源的なイメージに開かれるようになるのである（根源的なイメージ経験）。

第三章では、神女 A さんの成巫過程を検討した。神女とは、沖縄の村落において神に仕え、儀礼を司る女性祭司を言う。A さんは、伝統社会が崩壊しつつある中、自らの宗教経験を通して伝統的シンボルを主体的に捉え直し、それを豊かな神話的コスモロジーとして再生しつつある。

この事例研究における最も重要な発見は、「想像の領域」という概念である。それは、外界とは全く異なる現実性を持った一経験領域であり、そこでは、例えば夢において経験されるように、自我の意図からは独立してイメージが自律的に動いている。神女 A さんの成巫過程の検討によって明らかになったのは、自我がイメージと弁証法的に関わることによって、神話的コスモロジーが生成するということである。つまり、根源的なイメージ経験によってイメージの自律性と現実性に気づくことで、自我の合理主義的観点は相対化され、自我は次第に自律的イメージを尊重するようになり、それと弁証法的に関わるようになる。こうして、自我は自らの観点を絶えず相対化し、世界や他者に関する多様なイメージに出会うようになるから、合理主義的コスモロジーを超えて、豊かな神話的コスモロジーを経験するようになる。

また、神話的コスモロジーの生成過程におけるイメージ形成には、ある程度の法則性があることが分かった。先ず混沌から中心が発生し、天上界／地上／地下界が分離するイメージが生じる。天上界には、意識と無意識を含んだ心全体の中心である自己のイメージが投影され、自我は自己のイメージと距離を取りつつ関わり、そのイメージに照らして地上的存在としての自分固有の在り方を実現するようになる。また、地下界は初め破壊的な死の領域としてイメージされるが、自我と自己の建設的な関係が形成されるにつれ、死をもたらすと同時に再生をもたらす豊饒の世界としてイメージされるようになる。こうして、地上の自我は天上界／地下界から距離を取りつつ神々や霊と交流するので

あり、このような神話的コスモロジーが形成されることで、自我は圧倒的な自律的イメージと距離を取りつつ関わられるようになるのである。

第四章では、以上二つの事例研究を踏まえ、合理主義的コスモロジーから神話的コスモロジーへの変容過程を展開させる基本要因として、「自我の相対化」「想像の領域の発見」「自我とイメージの弁証法的関係」の三要素を抽出した。そして、この三要素についてより詳細な考察を行った。

まず、自我の相対化には二つの運動が必要であることを論じた。一つは、自我が自律的イメージに同一化し、一時的にそれと融合し、自らの分離性を喪失するという動き。それによって初めて、根源的なイメージ経験を自分の枠組みで狭めてしまう自我の動きが抑制され、イメージが持っている雰囲気や気分や動きなどをありのままに受け取れるようになる。しかし、この融合の運動ばかりが際立つと、イメージが実体化され、それを外界の現実と混同するような精神病的状态に陥ってしまう。そこで、もう一方の運動として、イメージを体験している自分を意識化し、外界と想像の領域を識別することが必要になる。そうすることで、自律的イメージを外界の現実と混同するような事態を回避し、イメージが想像の領域において持っている特有な意味を探求することができるのである。自我の相対化がなされるには、融合と分離の往復運動が不可欠なのである。本論では、この往復運動を「超越機能」(Jung)の概念によって捉え直し、考察を深めた。また、超越機能が障害された場合の病理として、過度の融合が起こる場合と過度の分離が起こる場合の二つの様態を考察した。

次に、Ehrenzweigによる「創作的イメージ」(創造性を誘発し象徴するイメージ)の研究や井筒による「M領域」(自律的イメージが存在し独自の運動様式を持つ深層意識領域)の研究を参考に、想像の領域におけるイメージ形成の法則性について考察した。すなわち、想像の領域に生じるイメージは、単に無秩序に生じるのではなく、説話展開的に生じ、それによって想像の領域に存在するイメージの全体構造を開示してくる。したがって、自我が表層意識の経験から離れ、説話展開的に生じる自律的イメージに弁証法的に関わり続けるならば、その過程で多様なイメージの全体構造が経験され、そうして現世も他界も含み込んだ存在世界の全体像(神話的コスモロジー)が把握される可能性がある。以上が、想像の領域におけるイメージ形成の法則性であり、その動きの意味であると考えられる。

本研究から得た結論をまとめるなら以下ようになる。すなわち、分離と融合の往復運動(自我の相対化)によって、自我とイメージの間に弁証法的関係が展開するにつれ、自我は想像の領域が持っている特有な機能を体験する。想像の領域では、イメージ全体を秩序化する動き(自己の動き)が機能しており、自我がその動きを実感することで現世も他界も包括するコスモスの全体性(神話的コスモロジー)が経験される。そして、自我は自己の動きに導かれながら、限界を持った地上的存在として自分固有の在り方を見極めるようになるのである。

論文審査の結果の要旨

本論文では、自由性や独立性に固執する近代的自我が合理主義的コスモロジーの限界を認識し、それを相対化し、宿命に規定されつつそれに対峙するとき、あるいは、自我が自律的イメージと弁証法的に関わっていくとき、共生的コスモロジーや神話的コスモロジーが生成してくることが、ALS(筋萎縮性側索硬化症)患者と沖縄の祭司である神女(カミンチュ)の事例に基づいて論述されている。このようなコスモロジーの変容は、しばしば、生きる意義の実感や、なすべき仕事の認識を伴うが、心理療法においても同様の過程が認められることが少なくない。

本論文では、実際の臨床事例におけるコスモロジーの変容過程が記述されているわけではないし、多数のデータが統計的に処理されているわけでもないが、事例の選択と彼らへのアプローチにはオリジナリティーが認められる。実際、ここで事例としてとりあげられた人々が、深い心理的苦悩を体験し、それを克服してきたことは確かであって、その過程をコスモロジーの変容と捉えることには十分可能である。論述においては、臨床心理学だけでなく関連分野の文献も丹念に読み込まれ、非常に説得力のある展開になっている。

以上のことから、われわれは本論文が、博士(人間科学)の学位に十分値すると判定した。